

ペスタロッチャー教育賞 受賞者紹介

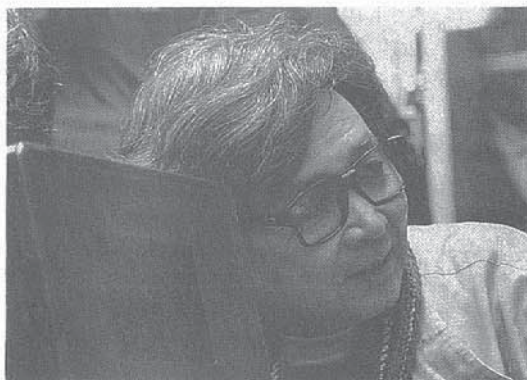
山田 洋次氏

1931年、大阪府に生まれる。少年時代、中国東北部に渡ったが、敗戦で帰国。1953年、東京大学法学部卒業。松竹大船撮影所に映画助監督として入る。1961年、『二階の他人』で監督となり、1969年、『男はつらいよ』を発表、以来50作近い国民的シリーズとなる。他に『家族』『同胞』『息子』『幸福の黄色いハンカチ』『学校』など監督作品多数。

山田洋次氏は、二つの大きな功績によってペスタロッチャー教育賞にふさわしい人物と言える。一つは、教育や学校そのものに関わる氏のメッセージであり、いま一つは、現代家族の人間形成力に関わる問題提起である。氏は、夜間中学の教室を舞台とした『学校』（岩波同時代ライブラリー161、1993）の中で、昼間の学校に居場所を見つけられなかった子どもたちや貧困のために学校に行けなかった人たちに視点を据え、学校の本質は「人間が人間になるための教育」にあることを訴えた。この視点は『寅さんの教育論』（岩波ブックレット12、1982）、『寅さんの学校論』（岩波ブックレット326、1993）に示された氏の言葉にも明らかである。また氏は、映画『家族』（1970）や『息子』（1991）の中で現代日本の崩壊してゆく家族や親子関係を見つめつつ、なおそこに人間のやさしさ、ぬくもり、あるいは人間の成長の原点を求め続けている。もちろん、四半世紀に及ぶ『男はつらいよ』シリーズにおいても主人公・寅次郎をめぐる家族関係、家族の持つ教育力への賛歌が、泣き笑いとともに謳われ続けていることは特筆されるべき点であろう。

言うまでもなく、ペスタロッチャーは人間形成の原点とそれに基づく教育方法のエッセンスを家庭の中に求め、親心や母心を基盤としながら孤児や貧児の教育に身を挺した人である。彼の生きた時代は近代社会の生成期にあたり、それは一面では古い社会の不平等や不自由の制限が廃棄される期待の時代であったが、他面ではかつて存在していた社会秩序とそれに依拠する人間存在の基盤が崩壊するときでもあった。このような時代状況は、教育の必要性を増大させると同時に、教育の困難さを余儀なくさせた。ペスタロッチャーの教育思想と実践はこの問題への真正面からの取り組みなのであり、人間の成長と教育の原点が、家庭における親と子の関係、人と人が間近にふれあう関係にあることを教えてくれるのである。これはまさに現代の日本の教育と家族が抱える課題であると言ってよい。

山田洋次氏の業績は、多くの監督作品の視点とモチーフ、題材において、このようなペスタロッチャーの精神につながるものである。それはまた、転換の時代の中で我々自身が直面している教育の諸問題について、映画メディアでこそ可能な訴求力をもって、幅広くかつ深く考えるよう眼を開いてくれるものでもある。現代の困難な教育の課題に立ち向かう勇気と希望を与え続けている氏の多大な功績に対し、第4回ペスタロッチャー教育賞を贈呈し、高く顕彰したい。



『寅さんの学校論』（岩波ブックレット）